

第4回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「life times」

栃木県 作新学院高等学校 二年 山本晴佳



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞／銀の星賞

『life times』

栃木県 作新学院高等学校二年 山本 晴佳

うす暗いのが好き。夕焼けの陽が落ちて、夜になる前のあいだ。風が吹いて、草が揺れるけど、音は鳴らない。そのぐらいの強さ。砂利の道。木造の家に石畳。のびる影はのっぽ。落ち着ける空気。

「アスカちゃん、ちよっとお味噌買ってきてくれないかい？ 切らしたのを忘れててね。」

「いいよ。お財布貸して。」

お婆ちゃんに開けっぱなしの引き戸から声をかけられて、私は座っていた玄関先から立ち上がった。お尻を軽くはたく。

「今日の夕飯はなあに？」

「里芋の煮ところがしとサバの焼き魚。おみそ汁の具は何にしようか。」

「私、なめこ汁が良いな。」

じゃあそうしようかねえ、と言うお婆ちゃんから財布を受け取ってスーパーに向かう。道には制服を着た子がいっぱい歩いている。

今日は平日、火曜日。学校に行かなくなって何日たったかな。自分とはちがう歩調で流れていく人達を見ながら、ぼんやりと頭をよぎる。前から部活帰りの女の子達が歩いてきた。私はうつむいて、早歩きで通り過ぎる。

味噌を買い、人込みは居心地が悪くてたんぼに挟まれた土の道を帰った。ゆっくりと、深くなつていく暗闇。でもまだ夜とはちがう。一色に統一されていく木や家。

私は空と木々の境をじっと見ながら歩いた。その景色を隠すように、突然空から人が降りてきた。驚く私の前で、薄暗い地面をその影がいつそう濃くする。

男の子だった。

私より少し高い背。ごく普通のショートカット・ヘア。いたずらっ子のよな顔。同じ年くらいの男の子が、空から、降ってきた。



「青い瓦屋根の子だよな？」

男の子の笑った口元からのぞく二本の鋭い牙を見て唾然と、吸血鬼だ、と思っただ。

「青い瓦屋根の家にいるよな？」

もう一度聞いてくる。また立派な牙が見えた。私は震える唇をゆっくりと開く。

「いるよ。」

胸がドキドキと鳴る。小さく深呼吸をした。

「・・・私の血を吸うの？」

「いや。すわないよ。」

男の子はけらけらと笑う。

「いくら吸血鬼っていったって毎日血を吸ってるわけじゃないさ。あの

家、前は婆ちゃんが一人で暮らしてただろ。あれ？って思ってたさ。おれ、コー

スケ。名前は？」

「アスカ・・・。私は、お婆ちゃんの孫。住んでるんじゃないかって、遊び

に来てるの。」

「ああ。言われれば婆ちゃんの若い頃に似てるな。」

「・・・お婆ちゃんを、知ってるの？」

「婆ちゃんが生まれたときから知ってる。おれ百才をこえてるんだ。面倒

で途中で数えるのを止めたからにはつきりとした年は分からないけど。千年ぐ

らい生きるからさ。」

私は呆気にとられた。思わず口が開く。

「千年も・・・？・・・。それってなんだか、つらくない？」

「なんで？」

「そんなに長く生きてると普通よりいっぱい嫌な事に出会うじゃない。た

とえば、・・・。たとえば、たくさん人間が自分を置いてどんどん

死んでいくし。」

私は言おうとした言葉を飲み込んで、別の言葉を吐き出した。

「なんで？人間とは生きる時間がちがうんだから仕方ないじゃん。」



あつけらかんとコースケは言った。確かに、ちがう生き物なのだから、当然かもしれない。

口ごもる私を吸血鬼は屈託なく見ている。

「ところで面白い物したって言ってたけど、まだ帰らなくていいのか？」
はっと我に返ると辺りはとっぷりと暗くなっていた。どこからか夕御飯の匂いがする。

「帰る。」

走りながら、迫り上がってくる興奮を抑えようとした。吸血鬼？ 千年？ 上から声が迫ってくる。見上げると、コースケが羽もないのに空を飛んでいた。なつつこい笑顔を浮かべて、片手を差し出す。

「送ってやるよ。この方が早い。」

コースケは驚いて動けずにいる私の手をつかんだ。その途端に躰はふっと軽くなり、私はコースケと一緒に空に舞い上がった。

おみそ汁を飲むと、ほんわりダシの味。

「おいしい。」

「そうかい。作ったかいがあったよ。」

小さな顔でニコニコと笑って喜んだ。お婆ちゃんの作ってくれたご飯を口に運ぶ。サバ。きのこ。鳥。みんな生きていたもの。これが、コースケにとっては私。生きるために食べるもので、必ず自分より先に死ぬもの。人から見た動物。

ご飯を食べ終え、私は開けっぱなしになっている縁側の引き戸によりかかって座った。片足だけ外に出してブラブラさせる。隣の部屋の電気が漏れてかき氷のシロップのような甘い明かりをつくった。電話が鳴ってお婆あちゃんが出る。口調で、お母さんだと分かった。受話器から漏れる声に耳を澄ます。

『アスカはまだ帰ろうとしませんか？』

ぎゅっと目をつぶった。ちらっと振り返ると、お婆あちゃんの背中だけが見える。



『お婆ちゃんの方からアスカに学校に行くよう話してもらえませんか？』
「気持ちには分かるけど、アスカちゃんが行きたいって思えるまで無理強いするべきじゃないよ。あの子にだって色々考えがあって休んでるんだから。」
ほっとした。何も言わなくても気持ちを分かってくれるお婆ちゃんが心強かった。

「アスカ、アスカ。」

ふいに呼ばれた声に庭を見ると、コースケがいた。目が飛び出るかと思った。
「帰ったんじゃないのっ？」

言って、あわてて後ろを見る。お婆ちゃんに見つかったら大変だ。小声で話しかける。

「こつち来て。その木の陰に隠れて。」

家の光の届かない庭の隅にコースケを連れていく。コースケは気付かれるのを心配する様子もなく、首を伸ばしておもしろそうにお婆ちゃんの方をうかがっている。

「夜は暇だからさ。遊びに来たんだ。て言っても、昼間は外にでれないんだけど。」

「灰になるの？」

「日がまぶしくて目が開けられないんだ。」
おどけた表情で片目をつぶった。この吸血鬼はあまりにもはつらつとしてる。

気が変わって血を吸いに来たのかもと、身構えていた自分がバカみたいに思えた。

「婆ちゃんは電話中だから気付かないよ。」

「お母さんとだからすぐに話し終わるよ。」

「そういうばアスカの家族は来てないな。なんでアスカだけ来たんだ？」

その言葉に考えたくないことを思い出す。口元が緊張するのを感じながら言う。

「私、ずっと学校を休んでるのよ。家にいるとお母さん達が学校に行きなさいって言うからおばあちゃんの家に来たの。」



「なんで行かないんだ？」

「……いじめられてるからよ。」

「なんで？」

「分らない。私は普通にしていたつもり。」

「ふうん。」

コースケのさらりとした感想に強ばっていた顔がもとに戻る。表情には私
の様子を伺う素振りがなかった。思ったままを言い、聞く。

人間よりずっと素直だ。私はなんだかおかしくなって、くすくす吹き出し
てしまう。

「変わってるね。」

コースケは人を動物のように思っているのだから、気持ちを隠す必要なん
てない。ああ、良いなあ、こういうの。コースケは笑ったままの私を見て、
自分もにっこり笑った。

心地よい風の夜。いつもと同じように縁側で開いた窓に寄りかかる。Tシャ
ツの襟をパタパタとあおぎながら、最後の薄い明かりの膜がどんどん剥がれ
ていくのを見ている。まだほのかに薄暗い程度だけど、気の早い月がすでに
出ている。月の中に一点の黒い影ができる。それはだんだんと大きく月をく
りぬいて、やがて人の形になり、コースケが降りてきた。

「いらっしやい。」

私はコースケに笑いかけた。あの晩以来、日が暮れるとコースケは必ずやっ
てくる。お婆ちゃんに見つからないようにこっそり会うのはスリルがあった。
ちらりと家の中をのぞくと、お婆ちゃんは台所で夕ご飯を作っている。あと
でお皿を並べるのを手伝おう。家とちがって、お婆ちゃんの手伝いは嫌じゃ
ない。

「最近日は落ちるのが遅いから外にでれる時間が少なくなっちゃった。」

「千年も生きるんだから少しぐらい減っても良いじゃない。」

「千年しか、だよ。まあ人に比べたら長いけどさ。人間ってすぐ死ぬもんな。」
私とコースケの時の感じ方は全然ちがう。それは、私たち人と、虫のよう



なものだろう。人間が虫の命をはかないと思って、でも虫はきつとそう思っていない。吸血鬼にとつて私はセミかもしれない。でも、セミだからこそ、私はコースケと話すのが怖くないんだ。

お婆ちゃんが物干し竿を雑巾で拭いている。今日は日差しが強くて、私はベランダに出ただけで汗をかいてしまった。

「下から洗濯物を取ってきておくれ。」

私は洗面所に行つて、洗濯機の中にある服を手近にあつたカゴにつめた。戻るとお婆ちゃんが床に手をついてしゃがみ込んでいた。

「お婆ちゃんっ?」

「ああ、大丈夫。たちくらみがね……。最近暑いから体がまいっちゃつてるのね。」

「平気?お婆ちゃんは横になつてなよ。」

「そこまでしなくても大丈夫だよ。」

「だめ。ちゃんと寝てっ。」

私はさつさと隣の寝室に寝る準備をする。タオルケットを渡すとお婆ちゃんは仕方なさそうに布団の上に横になった。窓も襖もいっぱいに関け放つて風通しをよくすると、直ぐに小さな寝息を立て始める。あまりにもか細い寝息な気がした。私はその姿を見て、音をたてないように洗濯物を干し、一階に下りた。

人間つてすぐ死ぬ。

家事を手伝おうと思つても何をしたらいいのか分からない。ぼんやりと時間を過ごし、頃を見計らつて洗濯物を取り込んだ。夕飯の仕度をする前にお婆ちゃんの様子を見に行く和不自然なぐらいぐっすり眠つていて、なんだか私も食べる気を失つた。下唇を噛んだ。

心細かつた。コースケに会いたい、と思つた。コースケほど、心を許せる人はいない。

夜になつて。私は情けない顔をしていたのだろうか。コースケは私の変化



にすぐ気付いた。

「何かあったのか？」

「お婆ちゃん、倒れたの。」

「そうか……。ひとまず落ち着けよ。」

私を縁側に座らせる。私はそれでもコースケに向き直る。コースケに会った拍子に、押さえ込んでいた不安が一気にあふれてきた。

「心配なの。お婆ちゃん大丈夫かな？　もしかして……。死んじゃったりしないよね？」

「おい、アス……。」

「私、そんなの嫌だ……。朝が、朝が来るのが怖かった。次の日になつたら、また学校に行かなくちゃならなくなる。今も同じ。時間がたつのが怖い。たてばたつほどお婆ちゃんは遠いところに行っちゃう。お婆ちゃんがいなくなつたら、私……。っ。」

「アスカ。」

少しだけ、強い声だった。

「落ち着けよ。話ならちゃんと聞くから。」

張りつめていたものが、とけていく。コースケの真っ直ぐな眼差しに不安が静まった。

お婆ちゃんは次の日の朝まで寝て、起きた。いつもと同じ様子には胸をなで下ろした。

「今日は良いところに連れて行ってやる。」

その夜、コースケは来てすぐに手を差し出した。私はあわてて庭に置いてあったサンダルを足につっかけて手をとる。すると、ふわり、とからだが浮いた。

お婆ちゃんの家がビー玉のように小さく見える。

体が軽い。このままどこまでも昇っていけそうだ。私は夢見心地で、遠ざかっていく地上の灯りを見た。不思議と長い距離を感じなくて、手を伸ばせば光に触れられる気がする。どこだかわからない場所の、大木のでっぺんに



賢治のまちから
高校生★童話大賞

私達は降り立った。まるで親のいる巣へと戻る雛鳥のよう。

枝に足をつけるときに、初めて足がすくんだ。腰を下ろした拍子にサンダルがするりと抜け、落ちていった。一瞬、つま先が寒くなる。落ちたサンダルが見えないか目を懲らしたけれど、足の下は暗くて何も見えなかった。

「アスカ、上を見ろよ。」

足元をのぞき込んでいるとコースケが言う。私は言われたとおり空を見た。私の視界を遮るものは何もなく、夜空が見える限り広まっ

家の灯りよりも小さい星々。コースケの牙みたいに細い月。くつきりと黒い空に浮かぶ。

「いい景色だろ。下にいたんじや家とか邪魔なものが多くてよく見えないからな。」

「うん。……死んじやいたかったんだ、私。学校に行くのを止めたとき。」

剥がれ落ちるように口から言葉が漏れた。

「なんで？」

言ったことを後悔する前に、コースケは軽く返してくる。だから心が重くならず

「私はいじめよりも嫌われてることの方が怖かった。学校に行かないのも、会わなければこれ以上嫌われずにすむから。だから、いつそ死んだ方が良いと思った。でもね。」

コースケは顔をのぞき込むようにして続きをたずねる。私は大きく息をついた。息を吐き出すと、涙がにじんだ。

「でもね。私生きてこの月を見て良かった。ありがとうコースケ。」

私たちは黙って枝に座っていた。しばらくして、隣にいるコースケの声が聞こえてくる。

「アスカが死んだら寂しいな。」

横目で見たコースケの表情は静かで、私の死を悲しんでいるけれど、受け入れていた。でもそれを冷たいなんて思わない。ゆつたりと戻ってきた穏や



かな感情に浸るように目を閉じた。連れてきてくれた気持ち嬉しい。ただ、人と同じ姿をしているから、少し淋しいだけで。

私はお婆ちゃんが昼ご飯の仕度をしている間に、足りない材料の買い物に出た。帰り、コンクリートの道を歩いていると、家の屋根が見えてきた頃から周りがザワザワしているのに気付いた。変に思いながら家の前に来ると隣の家のお婆さんがあわてて駆け寄ってくる。その様子に、ざわり、と嫌な予感がした。

「アスカちゃん、お婆あちゃんが倒れて、ついさつき救急車で運ばれていったのよ。」

頭が停止して、声が聞き取りづらくなった。

「回覧板を届けに行ってお婆ちゃんと話してたら急に倒れられて。お父さん達に電話して知らせましようね。」

そういえば、スーパーを出たときに、かすかにサイレンの音が聞こえた。でもそのときはのんびりと聞き流していた。だって、まさか。私は家の中に飛び込んで、震える手で、電話の番号をプッシュした。ほどなくして出たお母さんに隣のお婆さんから事情を話してもらおう。今からこちらに向かうから、それまで、家にいなさいとお婆さんを通して言われた。

一人になって、頭が動かず、じっとしていた。柱時計のカチ、カチと時を刻む音がいつもより少し間延びして聞こえる。でも時は確実に刻まれ、大きな魔物となって私にのしかかってきた。

お腹が鳴る。台所に行くと、コンロにお米の入った二つの小さな鍋と、まな板にきざみ途中の野菜がある。そういえば雑炊を作るはずだった。私はきざみである分の野菜を鍋に入れ、火をつけ味付けをし、黙々と食べた。

「まずい……。」

煮すぎたお米はべしやべしやになってしまった。同じように作ったのにどうしてお婆ちゃんの味と全然ちがくなるのだろう。お婆ちゃんの甘い煮物、ほくほくの肉じゃが、柔らかいお肉、酢のきいたちらし寿司……。

お婆ちゃんは、ここにいない。



まだ明るい時間から縁側に出て待った。そして辺りがゆるくゆるく暗くなつて、コースケが空からゆっくりと下りてきた。

「オッス。」

「オス……。」

情けないことに涙が出てきた。誰かに私を潰そうとする恐怖を聞いてほしかった。そしてそれはコースケでなくてはいけない。

「どうしたんだ？」

「お婆ちゃんが、また倒れて、今度は入院しちゃって……。どうしよう。お婆ちゃん本当に死んじゃうかもかもしれない。」

コースケは納得したように頷いた。

「ああ、仕方ないよ。寿命なんだから。」

心がつくんとした。

コースケはやっぱり吸血鬼で、私は人間でしかなくて、別の生き物で……。しぼり出すように涙が出てくる。コースケに人をそんな風に思つてもらいたくない。

「コースケ、死ぬって事はなくなるって事だよ。お婆ちゃんが死んじゃつたら二度とあの声は聞けない。手作りのご飯を食べるのも、顔を見る事も二度とできない。」

もし私とコースケのどちらかが死んだら、こうやってしゃべるのもその瞬間に突然なくなるの。」

私はコースケの手を取って自分の指の先をその手のひらにつけた。

「ねえ、分かる？ こうやって触れてる手も、一瞬でなくなるの。死んだ次の瞬間には、なんにもないんだよ。なんにもないの！」

コースケは確かめるように私の指を握る。少し、不思議そうな顔をしていて。

私自身おかしい感じがする。目の前にある手、こんなにもはっきりと触っているのに、いつか必ず消える。そんなことがあるなんて、信じられない。消えるなんて、思えない。



玄関の方で車の音がした。お父さん達が来たんだろう。

「おばあちゃんの病院に行つて来る。」

そう言つて、私はコースケの手から指を離し、家の中に戻つた。暗い縁側にぼつんと一人コースケだけが残る。鈴虫の声が聞こえた。

お婆ちゃんに声をかけるのが怖かった。

「お婆ちゃん……。」

小声で呼ぶと、目が静かに開けられた。

「アスカちゃん。来てくれたのかい。」

ベッドの上のお婆ちゃんは、元気だけをこつそりと持ち去られたようだった。

「光子さんと昌樹まで。すまないねえ。」

「そんな気遣いはいりませんから、早く元気になってくださいね。」

横に控えていた白衣の先生に呼ばれて、お父さん達は病室から出ていった。後に残された私は、丸いドーナツ型の椅子をベッドの側に持つていって、お婆ちゃんをのぞき込む。

「どこか痛い？」

「どこも痛くないよ。」

「のど乾いてない？何か欲しいものある？」

「いいやあ。アスカちゃんは優しいね。」

ちがうよ、優しくなんかじゃないよ。今までしてもらつたこと、やってあげただけなの。

「お婆ちゃんの家で居候してるからたまにはその分をかえさないと。」

私はへへ、と笑う。

「返す事なんてないんだよ。お婆ちゃんはもう充分もらつた。アスカちゃんがそうやって優しくしてくれた他は何もいらないよ。」

スローモーションに口を動かしている。

「人はね、誰かに大切に想ってもらえないと、ちつとも幸せになれないの。ひとりぼっちじゃ淋しい。分かるでしょう？」

小さく頷く。ひとり。毎日、つらかった。



「逆にそんな時間があるだけで人は生きてきて良かったって思える。アスカちゃんも誰かを好きになればなるほどその人は幸せになるし、アスカちゃんも誰かから大切に思われた分だけ、人生が満ちていくんだよ。」

だから、人と向き合うことを怖がっちゃいけない。いつか必ず、人生がとても素晴らしいものになる日があるから。」

はつきりとは口にしなくても、お婆ちゃんの言いたいことは分かる。そして、お婆ちゃんがなんでそれを今言うのかも。でもお婆ちゃん、私が一番信じられるコースケも、私が死んでも良いと思ってるんだよ。

私はお婆ちゃんの手を握って、その意味をかみしめた。

面会時間が終わるまで居て、お父さん達とお婆ちゃんの家に戻った。すぐに庭を見たけれど当然ながらコースケはいない。目が冴えて眠れそうになかった。パジャマを置いてこようと部屋に入ると、網戸からの風に揺れるカーテンに黒い人影が浮かんでいた。

「コースケ？」

カーテンにくっつきりと写る人型の輪郭。

「どうしたの？ もう帰ったと思ってた。」

あわててドアを閉めて窓に駆け寄る。その瞬間反射的にコースケが身を引いた。私も思わずカーテンの二歩前で止まる。

「なに。どうしたの？」

「血を・・・吸わせてくれないか？」

「お腹へったの？」

コースケの影がはつきりと首を振る。

「ちがう。アスカを吸血鬼にしたい。」

私は咄嗟に何も言えなかった。コースケの言っていることは分かるけど、理解できない。

「私は人間だよ。コースケにとって死んでも仕方がない、ただの、人間なんでしょう。」

「そう思った。でも、アスカが死ぬのが怖い。いなくなるのが怖いんだ。」



賢治のまちから
高校生★電話大賞

コースケがバラバラに分解して壊れてしまいそうに見えて、そろりとカーテンを開ける。

コースケは目だけの生き物になったかのように目をむいて私を凝視していた。微かに黒目が震えている。

「本当に私を必要としてくれるの？」

コースケは頷いた。私はかたい網戸を両手でガガガと開いた。

「ねえ、なんて顔してるの？ 私はまだ生きてるよ。あと五十年は大丈夫だって。」

「五十年なんて……。」

コースケは絞り出すように言う。

「オレにはすぐだ。」

……ああ……っ、そうだ。

なんでみんな生きられる時間がちがうんだろう。一緒に生まれて、同時に死んだら、淋しい事なんて何もない。でも。

お婆ちゃんの言っていた意味が分かる。

「私の生きられる時間は短いよ。だから私とコースケが一緒にいられる時間はもつと短い。けど、とても大切な時間だわ。短さなんか問題じゃないよ。たとえ私が死んでも思い出せば幸せになれるくらい素敵な時間にしていこうよ。」

力が湧いてくる。大切に想ってくれるなら。

「私はもう逃げない。」

頑張って生きるから、見ててよっ。」

コースケはじつと見てる。遅れて尋ねた。

「……そう思えるようになるかな？」

「きつと思える日が来るよ。だから一緒に生きよう、お互いの命を。」

ゆつくりと、コースケは顔に笑みを浮かべた。この笑顔が、私の一番尊い希望になる。